様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：４２６０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７０２５７

研究課題名（和文）突厥碑文の解読と関連遺跡の分析による南北モンゴル高原における遊牧中原の研究

研究課題名（英文）Study on the Pastoral Nomads' Central Plain of Northern and Southern Mongolia : From the viewpoints of Turkic Inscriptions and Archaeological Sites.

研究代表者
鈴木　宏節（Suzuki, Kosetsu）

青山学院女子短期大学・現代教養学科・助教

研究者番号：１０６０９３７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、６世紀から９世紀における中央ユーラシア遊牧民、とりわけトルコ系遊牧民の歴史動態を分析した。南北モンゴル高原にそれぞれ遊牧中原が歴史的に形成されてきた実態を踏まえ、考古資料に関しては現地遺跡を踏査し、関連する文献史料については、特に突厥碑文の解読（拓本資料等の実見精査）に基づき究明してきた。その結果、南北モンゴルの遊牧中原をつなぐゴビ地域の歴史環境がトルコ系遊牧民の活動のみならず、同時代における東アジアの覇者たる唐帝国の軍事あるいは外交的な動向にも影響を与えていたことが判明した。

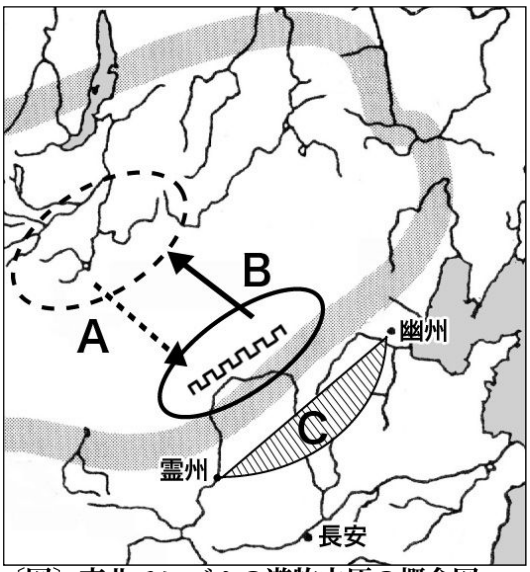
研究成果の概要（英文）：This study project analyzed the pastoral nomadic people (especially turkic nomads) lived on the central Eurasia from the 6th century to the 9th century. The author researched historical sites and turkic inscriptions located in Mongolia plateau and concluded that there ware 2 pastoral nomads' central plain at northern and southern Mongolia. That is, northern one is the pastoral nomads' central plain at Hangai Mountains and southern one is at Yinsan Mountains. Therefore this study project found that the Gobi area had great influence on not only turkic empires stemmed from these 2 pastoral nomads' central plain but also the Chinese empires.

研究分野：アジア史

キーワード：突厥　モンゴル　突厥碑文　遊牧民　トルコ　唐　ゴビ

１．研究開始当初の背景

本研究代表者は、これまで突厥碑文を「主」に漢文史料を「従」に、さらに考古遺跡の実見調査をてがかりに研究を推進してきた。拓本や碑文の実見によって遊牧民の史料読解を深化させた結果、中央ユーラシアのトルコ系遊牧国家「突厥」の国家構造や歴史意識を浮き彫りにしてきた。なかでも、北モンゴルに建造された碑文にもおいても南モンゴルの重要性を読み取る記述を見出したのである〔図〕。同時に漢文史料や中国領から発表された遺跡情報を検討した結果、突厥可汗国の展開において北モンゴルと南モンゴルの連関性が中央ユーラシア史のみならず、東アジア世界の軍事勢力の形成過程に重要な影響を与えていたことを指摘してきた。



〔図〕南北モンゴルの遊牧中原の概念図

Ａ＝北モンゴルの遊牧中原（ハンガイ・ヘンティ山脈を包含する）
Ｂ＝南モンゴルの遊牧中原（陰山山脈を中心とする草原地帯で、歴史上いくつもの長城を包含する）
Ｃ＝農業牧畜接壌地域／境界地帯

本研究課題は、文化人類学者である小長谷有紀によって、遊牧民の文化と歴史の展開から抽出された「遊牧中原」という地理概念を援用して［小長谷有紀「地図でよむモンゴル」『季刊民族学』85、1998 年］、いまだ全貌があきらかにされていない、内モンゴル自治区の陰山山脈地帯に焦点をあてることとなった。そこは農地開発によって毎年新たな遺跡や遺物が陸続と紹介されており、突厥の活動拠点と範囲を分析するに足るフィールドである。

換言すれば、本研究は、南モンゴルの遊牧中原を解明するものであり、その結果を踏まえつつ、研究代表者の諸研究を含めた研究蓄積のある北モンゴルの遊牧中原の分析を深化させ、南北モンゴルの遊牧中原を包括する突厥可汗国史、さらにはトルコ系遊牧民の歴史の復元を試みるものである。さらに、中央ユーラシア史と東アジア史の関連性を追求するため、農牧接壌地帯における定住農耕民側の軍事拠点にも地政学的な分析を加えるものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、内モンゴル自治区の陰山山脈地帯に現存する関係遺跡を調査し、南モンゴルにおける遊牧中原の位置付けを行うことである。

具体的には、従来、報告されてきた石人や埋葬遺跡（板石墓、石囲い墓）、唐代の軍鎮（受降城や羈縻支配の拠点となった古城趾）の実見調査となる。先行研究の報告では遺跡の状況が十分に知られないためであり、正確な位置をもとにした分布図を作製するとともに、遺跡と遺物のデータベースを作成する。

あわせて南モンゴルの遊牧中原と北モンゴルの遊牧中原を比較検証することも目的としている。そのため当然、両地域・中原をつなぐゴビ地域の研究が欠かせない。従来、取り上げられることが少なかった、等閑視されていたゴビの遺跡や史料を考察に加え、これらを統合、分析することによって、中央ユーラシアにおける古代トルコ系遊牧民の動態を具体的かつ実証的に位置付けることを目的とする。

３．研究の方法

本研究では２つの方法によって研究を進める計画である。すなわち、(1)突厥関連遺跡に実際に赴いて実見調査を行う。そして、それを踏まえて、(2)国内にて調査結果の考察、分析を行ったのち、南北モンゴルの遊牧中原の存在とその歴史的意義を検証し、中央ユーラシア史における古代トルコ遊牧民の役割を解明すること、である。

前者(1)については、研究目的の内容に即して、南モンゴルについては、中華人民共和国・内モンゴル自治区の諸遺跡を調査地として選定する。また、北モンゴルについては、モンゴル国中央部に位置する諸遺跡ならびにゴビに現存する諸遺跡を対象とする。

(2)に関しては、突厥碑文が主要考察対象となるが、広島大学や九州大学など国内研究機関を訪問して拓本の精査を実施する。

以上の作業を経て得られた成果を、国内外の諸学会で報告するほか、論文を執筆して発

信してゆく。

４．研究成果

本研究では、以下のような現地フィールド調査を実施してきた。

実施年度	調査地	目標
２５	モンゴル国	北モンゴル ハンガイ地域
２６	モンゴル国	北モンゴル 特にゴビ地域
２７	中国・内蒙古	南モンゴル 特に陰山地域
２８	中国・内蒙古 モンゴル国	南モンゴル 特にオルドス 北モンゴル 特にゴビ地域

研究計画の時点では南モンゴルの遊牧中原調査を先行させていた。しかし、本研究の理論的骨子を確立させるために、初年度は北モンゴルの調査と既発表史資料の網羅的な分析を優先させて行った【主な発表論文等＞雑誌論文⑦】。

その結果として、研究期間後半の南モンゴル調査、すなわち中国領内蒙古自治区などにおける遺跡調査をより広範囲に拡大して実施することができた。具体的にはオルドス地域におけるトルコ系遊牧民の痕跡のみならず、中華帝国の軍事遺跡や前後する時代の諸遺跡を併せて分析することができた。

一方、モンゴル国での調査については、計画の通り、ゴビ地域の調査に集中した。とりわけ南ゴビ県、中ゴビ県に散在する遺跡や史料を３次にわたり踏査することができ、古代トルコ系遊牧民によるゴビ縦断経路の手掛かりを収集することができた。以下は特に顕著な成果があげられた、あるいは今後の研究の進展が予想される主要遺跡と史料である【主な発表論文等＞雑誌論文①】。

例１）中ゴビ県デル山の漢文銘文…７世紀中葉、唐代の史料、ゴビ縦断ルートの痕跡
例２）中ゴビ県デルゲルハンガイ郡の漢文銘文…古代トルコ遊牧民以前の中華帝国によるゴビ縦断ルートの痕跡
例３）南ゴビ県のサイリン=バルガス…年代不詳ながら漢籍への記述が予想される草原都市、土城遺址

以上の現地調査とその分析の結果、南北モンゴルをつなぐ経路、すなわちゴビの縦断路の重要性は、ただ遊牧民の側だけではなく、中華帝国の側にも見出される。例えば、中華の領域が西北方面に拡大された時代、つまり、唐の前半期においては、唐の覇権のもと南北モンゴルの遊牧中原が統合されている。この際にゴビのルートが積極的に利用されたことは、本研究が発表した２論考をもって解明されている【主な発表論文等＞雑誌論文③、雑誌論文④】。同時に北モンゴルでは草原都市が築かれており、モンゴル南北をつなぐ交通路が実質的な物的交流をうながしていた証左となる。

本研究の成果は、南北モンゴルの遊牧中心という作業仮説を検証するものであり、両者をつなぐゴビの歴史的重要性を浮かびあがらせるものであった。ゴビの歴史環境を復元することは、中央ユーラシア史あるいは東アジア史に、かつまた古代トルコ遊牧民の歴史上に大きな影響を与える。すなわちトルコ遊牧民以前の民族大移動期の遊牧民情勢、また１３世紀のモンゴル帝国の歴史動態に鑑み、南北モンゴルをつなぐゴビ地域の歴史解明が今後の課題となる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７　件）

①鈴木　宏節、2016 年度夏期モンゴル・ゴビ調査報告、青山學院女子短期大學紀要、査読無、第 70 輯、2016、111-129
https://www.agulin.aoyama.ac.jp/opac/repository/1000/19593/

②鈴木　宏節、モンゴル現存古代トルコ碑文箚記――ウイグル≪シネウス碑文≫北面の再検討――、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書、査読有、14、2016、43-58（嶋田義仁 編、ユーラシア文化における東西交流、中部大学中部高等学術研究所）

③鈴木　宏節、ゴビの防人――モンゴル発見の唐代漢文銘文初探――、史滴、査読有、第 37 号、2015、59-80

④鈴木　宏節、唐の羈縻支配と九姓鉄勒の思結部、内陸アジア言語の研究、査読有、第 30 号、2015、223-255

⑤鈴木　宏節、モンゴルでトルコを学ぶ――中央ユーラシア史における突厥碑文――、ふびと、査読有、第 66 号、2015、1-39

⑥鈴木　宏節、突厥碑文から見るトルコ人とソグド人、アジア遊学、査読無、175 号、2014、198-216、（森部豊 編、ソグド人と東ユーラシアの文化交渉、勉誠出版）

⑦鈴木　宏節、内モンゴル自治区発現の突厥文字銘文と陰山山脈の遊牧中原、内陸アジア言語の研究、査読有、第 28 号、2013、67-100

〔学会発表〕（計　３　件）

①鈴木　宏節、ゴビの防人、第 15 回遼金西夏史研究会大会、2015 年 3 月 22 日、大阪大学（大阪府豊中市待兼山町）

②鈴木　宏節、唐の羈縻支配に関するモンゴル高原の漢文石刻三題、第 3 回“中国中世（中古）社会諸形態”国際大学院生若手研究者学術交流論壇、2014 年 2 月 28 日、明治大学（東京都千代田区神田駿河台）

③鈴木　宏節、突厥の石人から見た南モンゴルの遊牧中原、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究・第 8 回国際シンポジウム「岩絵文化と人類文明の形成――新疆，中央アジア，北欧，アフリカ――」、2013 年 10 月 27 日、名古屋大学（愛知県名古屋市千種区不老町）

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　宏節（SUZUKI，Kosetsu）
青山学院女子短期大学・現代教養学科・助教
研究者番号：１０６０９３７４

(2)研究分担者　なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者　なし
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者　なし
（　　）